

〈特集〉 現代東南アジアにおける宗教の越境現象

——タイ, ミャンマーを中心に——

序

片 岡 樹 *

Contemporary Southeast Asian Religions in Boundary-Crossing: Case Studies from Thailand and Myanmar

Introduction

KATAOKA Tatsuki*

Abstract

This special issue focuses on religious boundary-crossing in contemporary Thailand and Myanmar. These two countries have long inspired scholars of frontier studies as well as religious studies of Southeast Asia. Recent developments in trans-border mobility between Thailand and Myanmar have also contributed to greater interest among scholars in Thai and Myanmar studies, for example in boundary-crossing religions. In this special issue, we use the term “boundary” in three dimensions: national boundary, ethnic boundary, and boundary of institutionalized religions.

We start our discussion with an optimistic expectation of increased resistance from peripheries against nation-states, state-sanctioned ethnic categories, and religions institutionalized by such states. However, discussions based on each field reveal more complex realities. In some cases, the Buddhism practiced by multi-ethnic local populations has recently undergone categorization according to ethnicity due to the increased mobility of religious leaders. Many charismatic monks are enthusiastically worshipped by marginalized ethnic minorities along the frontiers of nation-states. However, we find that they are by no means antagonistic to existing state power. Missionary Buddhism is supposed to be a typical form of religious boundary-crossing. Nevertheless, through this activity, the very concept of Buddhism is questioned when missionary monks are forced to observe their precepts in an environment without lay support.

Essays in this special issue are reflections from our struggle to understand and explain the complex

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 : Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University, 46 Shimoadachi-cho, Yoshida Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, Japan
e-mail: kataoka@asafas.kyoto-u.ac.jp

situations faced by contemporary Southeast Asian religions. Needless to say, our conclusions are not definitive answers to these questions. Rather, we would like to invite readers to join the ongoing discussion on these challenging topics.

本特集は、現代の東南アジア大陸部における宗教の越境現象を、国家の境界線を越える側面、民族境界を越える側面、あるいは制度宗教の枠を越える側面に着目し、主にタイ、ミャンマーの事例から考察するものである。¹⁾ それぞれの越境がタイ、ミャンマーにおいてどのように展開されているのか。それを描き出すのが本特集の目的である。

なぜこの二国なのか。タイ、ミャンマーはそれぞれ似通った民族構成をもつ隣国であるというにとどまらず、宗教の越境という点に関し、タイ研究者とミャンマー研究者が互いに相手の事例を参照し合うことで議論を発展させてきたため、多くの論点がこの二つのフィールドをめぐって共有されてきたのである。東南アジア大陸部上座仏教世界の分析においては、開放体制を維持し続けてきたタイ国を舞台に、石井やタンバイアが汎用性の高いモデルを提供してきた。²⁾ その一方、越境という側面に関しては、ミャンマーをフィールドとするリーチの辺境論や民族境界の可変性に関する議論がひな型とされてきた [Leach 1960; リーチ 1995]。つまり宗教と越境という主題をめぐっては、東南アジア大陸部における良質の知的伝統が、タイ国とミャンマーとの接点において交錯するのである。

本特集は、そのなかでも泰緬両国の山地にまたがる少数民族地域を事例研究の中心にとりあげる。スコット [2013] が明快に論じているように、彼が「ゾミア」と呼ぶ東南アジア大陸部北部（中国南部も含む）の少数民族地域は複数の国家の周縁を構成しており、また山地・平地関係を含む複雑な民族のモザイクが見られ、しかもそこでは平地国家の大伝統（タイ、ミャンマーの場合でいえば仏教）とそれに抗う少数民族との対立図式が展開されてきた。つまり「ゾミア」に着目することで、国家、民族、宗教という越境の三局面を同時に把握することが可能になるわけである。

ところで、上記のような宗教をめぐる越境現象を、冷戦終結後の現在という時点で眺めた場合、いくつかの仮説がただちに頭に浮かぶであろう。そこでの変数としてまず思いつくのは、冷戦による分断から解放された域内諸国のボーダーレス化であり、この傾向をさらに推し進め

1) 本特集は、科学研究費補助金（基盤A）による共同研究「東南アジア大陸部における宗教の越境現象に関する研究」（代表：片岡樹、平成22-24年度）の一部メンバー有志が東南アジア学会第91回研究大会（平成26年6月、於南山大学）において組織した分科会（本特集と同名）をベースにしている。特集を組むにあたり、同パネルでのコメンテーターをつとめた土佐桂子氏にも執筆陣に加わっていた。上記科研究研究会、および東南アジア学会での討論を通じ多くの助言をいただいた。記して謝意を表したい。

2) 代表的な例としては、石井 [1975] および Tambiah [1984] などを参照。

るGMS流域圏開発構想やASEAN統一市場構想である。冷戦の終結はボーダーレス化を生み、ボーダーレス化は必然的に近代国民国家の相対化をもたらすという展開と言い換えてもよい。

元来が国境線の曖昧な多民族的空間であった東南アジア大陸部においては、近代国家の成立以降、国境線をまたいで分布する諸民族を国民国家単位に切り分け、それぞれの帰属先国家の国民（場合によっては少数民族としての）というカテゴリーに囲い込む努力が行われてきた。上に述べたような展開（ボーダーレス化）は、したがって国境をまたいだ同胞民族の相互往来を再活性化し、近代国家による民族の分断と囲い込みという営為を部分的には無効化ないし相対化していくと考えられる。デービスの表現を借りれば、ポスト近代の時代になって前近代の社会的ネットワークが復活するという一種のアイロニーである [Davis 2006]。

宗教についても似たようなことがいえるかもしれない。近現代東南アジア諸国において宗教というのは、反共諸国の場合は国民統合の基軸として、社会主義諸国の場合は政治体制への潜在的脅威として、いずれも国家による管理の対象となってきた。公認宗教制度などの方法により、国家が提供する枠組みの中に宗教を囲い込みつつ制度化していく、というのがそこでは（政治体制の差こそあれ）おおむね共通している。しかしながら、冷戦構造の消滅や国境をまたいだ人の移動の増加、さらには旧来の民族的紐帯の再活性化などは、国家による宗教の独占的管理という前提を怪しくする。

つまり、冷戦後に国境が相対的に解放されつつある東南アジア大陸部諸国においては、近代国家そのもの、および近代国家が囲い込んできた民族、宗教といった諸制度が疑問に付されつつあるということになる。³⁾ その中でも特に宗教現象に着目することで、今述べた論点をさらに展開しようというのが、我々の当初のもくろみであった。

しかしこのナイーブな思い込みは、ほどなくして大きな壁に逢着した。各地の事例を集めつつ討論しているうちに、事態はそれほど単純でないことが見えてきたためである。そもそも越境というのが、近代国家（とそれが規定する民族、宗教）の弱体化の指標として扱われるのか。我々の当初の仮説が直面した壁というのは、まさに議論の大前提に関わる問題だったのである。

国境線をまたぐという意味での越境に関していえば、現代の越境というのは往々にして、国境が事実上意味を失ったからではなく、逆に国境が厳然たる意味をもっているからこそ生じている現象だということにもう一度留意する必要がある。民族に関しても、民族境界をまたいだ宗教活動が目をはくのは、国家主導による民族境界の固定が一定の効果をあげていることの逆説的表現である。同じことは、国家が提供する「××教」という枠組みに沿って制度化されて

3) ポスト冷戦期の東南アジア大陸部の周縁民族に関しては、こうした語り口の分析が主流をなしてきたといえる。国境をまたいだ同一民族同胞の共同体が近代国家の正統性を掘り崩すに違いない、という議論の流行に対しては、ダイアナが西双版纳の事例から反論を行っているので参照されたい [Diana 2009]。

きた宗教についてもいえる。東南アジアの多くの国で現在そうであるように、「××教かくあるべし」というドグマが公権力によって制度化される以前は、宗教間の境界をまたぐような活動は注目すらされていなかっただろう。

そもそも境界のないところに越境は生じえない。ようするに、越境という現象が人目につくものとして析出されてくるのは、国家や民族や宗教が境界線によって囲い込まれているからなのである。例外が目立つのはルールが機能しないからではなく、むしろルールが確立されているからなのだとすれば、それをもってルールの前提を無効化するのは無理な相談である。

今述べたのは、改めて論理的に考えればそうなるという話（道を渡るためにはまず道が存在しないとイケない）である。しかし、ナイーブな越境礼賛へのこうした素朴な疑問を新たに出発点に据えてみると、フィールドでも多くの事実が見えてくることに気づいた。

たとえば、従来はローカルなリング・フランカを中心に複数民族間で共有されていた宗教的空間が、經典の民族語訳や民族ごとの教団形成などによって民族単位に細分化されつつある、という事例に我々はしばしば出会う。ミャンマーにおける仏教經典のパラウン語化運動（小島論文）やパオ独自のサンガの形成（村上論文）などといった事例がそれにあたる。ここで皮肉なのは、そうした運動を先導するのが、往々にして異民族地域での幅広い移動経験を有する僧侶や仏教知識人などだという点である。いいかえれば、民族境界の越境が、かえって民族境界に沿った教団組織や經典知識の再編をうながしていることになる。従来これら少数民族と平地国家との関係は、前者が後者を模倣するか、さもなくば前者が後者に抵抗するか、という視点でもっぱら語られてきた。しかしパラウンやパオの仏教運動が示しているのは、少数民族社会から支配民族社会（あるいは国家の中心）への移動経験が、少数民族独自の仏教実践の構築にフィードバックされるという展開である。ここからは、模倣か抵抗かという従来の切り口では見えてこない、この地域における少数民族と国家との関係を動的にとらえ直すためのヒントが得られるかもしれない。

泰緬国境周辺には、国境の両側を自由に往来し、国家の周縁に位置する人々の千年王国的な期待を集めるカリスマ僧が多く存在する。こうした宗教者の活動はしばしば国家による宗教の管理をすり抜けており、近代国民国家のなかで不利な立場に置かれた少数民族たちへのオルタナティブを提供している。しかしその一方で、同じ宗教者が国家の統治エリートと無差別に提携しているということも珍しくない。むしろそうした無差別な支持者の受け入れこそが周縁部での自由行動を支えている側面もあり、そこでは越境する宗教者の存在が国家を相対化するか、あるいは逆に国家による周縁統治を強化するのか、という二者択一の問いそのものの妥当性が疑問に付されることになる（速水論文、片岡論文）。

ところで、宗教が越境するというとき、それはしばしば、当該宗教が及んでいない地域への普及を意味する。その意味では布教活動というのは越境の究極的な形態である。布教活動の場

合、当該宗教を支える社会的インフラが存在しない場所への越境となるので、そこではしばしば、その宗教が成り立つ上での諸前提そのものが（たとえば戒律違反のようなかたちで）試されることになる。宗教の越境への視点はその極限において、宗教の成立条件そのものへの問いに姿を変えていく（土佐論文）。

かくして我々は、そもそも宗教（あるいは本特集の場合については仏教）とは何かという、より根源的な問いに直面することになる。本特集の村上論文と小島論文が示唆するのは、研究者の目には宗教の越境あるいは逆に民族単位の囲い込みと映る現象が、当事者レベルでは単に自身の宗教環境の利便性を高めている行為にすぎないかもしれない、という点である。これはすなわち、東南アジア宗教へのアプローチにおいて越境の有無の検証が自己目的化した場合、当事者不在の宗教論がもたらされてしまう可能性への警鐘でもある。

同じように、宗教の越境をめぐる議論につきまとう、周縁者と権力者（近代国家）の対決、あるいは前者による後者への反逆や抵抗、という図式もまた再考を迫られる。速水論文と片岡論文が示しているように、越境する宗教者に群がる人々の営為は、ひょっとすると今述べたような争点を重視していないかもしれないのである。速水と片岡が論考の最後においてともにたどりつくのは、周縁部における宗教というのは単なる「弱者の武器」⁴⁾ではなく、おそらくそれ以上の何かなのではないのかという問題提起である。

いっぽう土佐論文が描くように、越境の論理をとことん追求すると、当該宗教の成立条件の臨界点が試されることになる。自己の内外において仏教を完成するという意味をもつ、ビルマ語でタータナー・ピュと呼ばれる行為（布教もそこに含まれる）を徹底していくと、むしろ戒律違反のリスクを高めてしまうというジレンマがそこにある。やはり越境から発した問いは、宗教とは何かという次なる問いへと導かれていくのである。

このように、宗教の越境への着目から始まった我々の研究は、その到達点において、当初のもくろみとはやや違った着地点を見出すことになる。越境の局面を追い続けていくと、いつのまにか越境という争点それ自体は後景に退いてしまうのである。それに代わって前景化してくるのは、人々にとって宗教とは何か、仏教とは何か、それらはいかにして成立しうるのかという、よりメタレベルでの問いである。

ならば越境を論じることは無意味であったのかというと、我々はそうは考えない。むしろ越境という視点を一種のツールとして導入することで、今述べたような論点がむしろクリアに見えてくるからである。もちろん、個々の論文が展開する個々の論点については今後も発展の余地がある。本特集での問題提起（とおそらくはそれに対して生じるであろう批判）を通じ、東南アジア宗教を論ずるための有益な討論の呼び水になれば、と願っている。

4) いうまでもなく、ここではスコットの抵抗論における用語（weapons of the weak）を念頭においている [Scott 1985]。

参 考 文 献

- Davis, Sara. 2006. Premodern Flows in Postmodern China: Globalization and the Sipsongpanna Tais. In *Centering the Margin: Agency and Narrative in Southeast Asian Borderlands*, edited by Alexander Horstmann and Reed L. Wadley, pp. 87–110. New York: Berghahn Books.
- Diana, Antonella. 2009. Re-Configuring Belonging in Post-Socialist Xishuangbanna, China. In *Tai Lands and Thailand: Community and State in Southeast Asia*, edited by Andrew Walker, pp. 192–213. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 石井米雄. 1975. 『上座部仏教の政治社会学——国教の構造』東京：創文社.
- Leach, E. R. 1960. The Frontiers of “Burma.” *Comparative Studies in Society and History* 3(1): 49–68.
- リーチ, E. R. 1995. 『高地ビルマの政治体系』関本照夫 (訳). 東京：弘文堂. (原著 Leach, E. R. 1954. *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*. London: The Athlone Press.)
- Scott, James C. 1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven and London: Yale University Press.
- スコット, ジェームズ C. 2013. 『ゾミア——脱国家の世界史』佐藤仁 (監訳). 東京：みすず書房. (原著 Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven and London: Yale University Press.)
- Tambiah, S.J. 1984. *The Buddhist Saints of the Forest and the Cult of Amulets: A Study in Charisma, Hagiography, Sectarianism, and Millennial Buddhism*. Cambridge: Cambridge University Press.

(2015年5月13日 掲載決定)